

2023年12月31日(日) / 説教者：神谷武宏

説教：「闇に光」

聖書：マルコによる福音書 2：1～12

「東の方から来た学者たち」は、異邦人、外国人である。彼らはこの時、「エルサレムへ行き…ユダヤ人の王としてお生まれになった」キリストを捜しに来た。「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった」とある。王も、エルサレムの人々も、素直にありがとう…ではなかった。その「不安」とは何か？

王であるヘロデは、この時王様としての地位が脅(おびや)かされる晩年に差し掛かっていた。「ユダヤ人の王」が生まれたと聞いて自分の地位が脅かされる「不安」があった。この後、ヘロデ王はキリストが生まれたとされるベツレヘムに軍隊を送り、その地域一帯にいる2歳以下の男の子を、一人残らず殺させた(マタイ 2:16)。いつの時代も強者の不安は、弱者へと向けられる。日本の15年戦争時代に日本が朝鮮や中国、東南アジアに侵略戦争を犯したことも列強国とされる欧米国に肩を並べるがために経済的不安、物資不足の不安からアジアへの侵略戦争を始めた。不安が弱者へと向かうのは、いつの時代も起こり得ること。今また、沖縄にどうしても軍事基地を造りたい、軍事強化をはかりたいと島々が狙われている。国家のあり方は、何かにおびえているかのようだ。中国か、北朝鮮か、米国か、その国家の不安が沖縄へと向けられている。暴力による不安解消は、決して本当の解消にはならないことを聖書は教えている。

エルサレムの人々の不安は何か？それは自分たちの考えおよばなかったところでキリスト誕生の知らせを受けたこと。では、旅する博士たちはどうか？星を目当てに旅をする博士たちも不安はあったはず。不安ゆえに苦し紛れにヘロデ王にまで会うことをする。しかし、博士たちはキリストにお会いすることができた。何故か？星の光に導かれたから？

それは、彼らが不安はありつつも“キリストに会いたい”という「希望」があったから。その希望とは、信仰に置き換えられるもの。そのことを現しているのが、博士たちが捧げた「黄金(王)、乳香(礼拝)、没薬(十字架と復活)」という贈り物に見ることができる。その希望、信仰とは、行く手をさえぎり、歩むべき道が見えなくなる「闇」の中で、輝く光に置き換えることができる。光は、たとえ小さな光でも闇が深ければ深いほど小さな光は大きく光を灯し、歩むべき道を示してくれる。ゆえに小さな信仰でもいい。されど、絶やさずに灯していきたい。(神谷)